

底が突き抜けた」時代の歩き方 337

「拉致問題」をナショナリズムな枠組みに閉ざしてはならない

終戦間近の中国の一農村で起こった日本軍による村民大虐殺を描いた映画『鬼が来た！』は姜文監督自身語るように、必ずしも日本軍の蛮行に焦点を当てた反日映画の枠組みに収まるものではなく、日本兵に限らず、人間というものは選択不可能な戦争という危機的状況の中でどのような精神状態に陥るか、というテーマを追っている。インタビューで彼が、「時に、私は、人間というのは、戦争を避けられない存在だと思うこともある。自分たちが信じているほどに人間というのは頼りにならず、疑ってかかればならない存在なのではないか」と答えているのは印象的だが、もちろん、その認識は彼が人間をペシミスティックにみているのではなく、逃れられない状況に人間が放り込まれてしまったとき、尋常ではないどのようなことを惹き起こす存在であるかを見通そうとする冷徹さからもたらされている。

したがって、善玉悪玉を描写しているわけではないこの映画に対して、中国当局は反日映画の定番である日本軍の悪行を描いているにもかかわらず、再編集を命じて国内での上映を禁止した。その最大の理由として映画が主人公の村人の家に深夜、謎の男が扉の外から銃を付きつけて、日本兵と通訳の中国人を詰め込んだ二つの麻袋を無理矢理押し付け、立ち去る冒頭のシーンから始まることが推測される。その謎の男が戦中派世代なら誰でも八路軍の兵士であることがわかり、八路軍の流れを汲む共産党軍—中国政府の描写を嫌ったためと思われる。のどかに暮らしていた村人たちを戦争に巻き込んだのは、紛れもなく謎の男—八路軍であることが明白だからだ。つまり、「鬼」は八路軍の兵士が二つの麻袋を村人の家に投げ入れることを通じてやって来るのである。日本軍の大殺戮はその一本道を辿って見舞ってくる。

映画『鬼が来た！』の「鬼」は映画を注意深く観つめるなら、大虐殺を犯す日本軍そのものであるよりも、日本兵と中国人の通訳の捕虜を詰め込んだ二つの麻袋が村の中に投げ込まれることによって、否応なしに村人たちが戦争に巻きこまれてしまう状況が作りだされる中に潜んでいることに気づく。その追い詰められた状況下で村人たち自身が捕虜を殺そうとする「鬼」に何度もなろうとしたし、挙げ句の果てに日本軍が「鬼」として猛威を振るうことになった。捕虜の入った麻袋を村に投げ込む行為そのものに「鬼」が張り付いていたとみなすなら、紛れもなく八路軍の兵士が「鬼」の種子を村中にばらまいたのである。「鬼」はどこからやって来るかを問いながら、映画『鬼が来た！』に

ついていくつかの角度から論じ、戦時下の精神状態に踏み込むなかで沖縄の読谷村・チビチリガマや渡嘉敷島で起こった「集団自決」にこの間、向かい合ってきた。

映画『鬼が来た！』や沖縄における戦時中の「集団自決」について書いているときに、周囲から音量を増して聞こえてくるのが「拉致問題」という掛け声であった。拉致被害者家族の祈るような沈痛な表情を思い浮かべながら、沖縄で起こった「集団自決」もまた、集団的「拉致」の極限的な結末にほかならないという思いを何度も禁じえなかった。兵士たちも戦場に拉致されていったように、沖縄の住民も「集団自決」というかたちで二度と戻ってこれないところへ拉致されていった。戦時下の精神状態そのものが「拉致」を惹き起こす磁場になっていたのであろう。同じ言葉でありながらも、韓国語と朝鮮語ではトーンが著しく異なっており、北朝鮮では口調そのものがすでに臨戦態勢を帯びているように「気をつけ！」をしており、「国のために死ねる国」の戦時下の精神状態の中からしか「拉致問題」は解き明かせないと考えられる。

映画『鬼が来た！』でたぶん中国当局が問題にしたであろう、日本兵と中国人の通訳を詰め込んだ二つの麻袋が謎の男によって村人の家に投げ込まれるシーンが、今回の「拉致問題」の中でも象徴的に浮かび上がってきている。拉致被害者5名のいずれもが袋詰めにして船に乗せられたことを話しており、そのうちの一人である曾我ひとみさん（43）は拉致状況について、「袋に入れられ船に乗せられたとき、暴れてもがく人がもう一人いた」と関係者に話していることが、10・26付産経新聞に掲載されている。新聞には更にこう記されている。

《関係者によると、曾我さんは「(真野町の)道をお母さんと歩いていたところ、突然二人の男によってお母さんといっしょに大きな木の下に引きずり込まれた」と説明。さらに「私は口を塞がれて、黒い大きな南京袋に入れられ、担がれて舟に乗せられた」とし、他の拉致被害者と違って「たたかれたことはない」という。

その上で「舟には暴れて激しくもがく、もう一人の人がいた。うめき声から母さんだと思った」と説明。だが、その後については「分からない」とうつむいて目を閉じ、ミヨシさんの消息についての回答は避けた。》

作家の西木正明が同日付の同紙に一文を寄せ、拉致が頻発した1970年代後半は日本人のみならず、同胞の韓国人も多数拉致しており、《北朝鮮の工作機関にとって、拉致そのものはある意味で常套的な手段であった。彼らがお手本にしたのは旧ソ連の軍や国家保安委員会傘下の特殊機関である。地下戦争の舞台で、これらの機関は、ほとんど日常的に拉致誘拐を行っていた。》として、第二次世界大戦末期の連合軍のノルマンディー上陸と同時期、イタリア駐在の日本人商社マンや外交官、軍人4人がたてつづけに拉致されたり殺されたりする中で、イタリア駐在日本公使が袋詰めにして拉致されたものの、幸い救出された事件についてこう記している。《後にこの拉致犯は、当時ソ連に

亡命していたイタリア共産党指導者パルミロ・トリアッティ指揮下のパルチザンと判明。パルチザンのリーダーは、ソ連で地下工作の訓練を受けた男だった。拉致対象者を袋詰めにして運ぶという手口は、旧ソ連圏の地下工作部隊共通のものだ。》（そういえば、映画『K T』の中で金大中氏が日本から拉致されるときも、袋詰めに使われていたのではなかったか。）

日本の拉致被害者たちも北朝鮮の工作班が踏襲した旧ソ連特殊部隊の手口の餌食になったという以外ないが、それにしても首をひねるのは「拉致」の理由である。西木正明もいうように、拉致した日本人になりすまして対南工作を行うという理由はその通りだとしても、日本語の学習や日本人の生活慣習に役立てるための理由なら、朝鮮総連の旗振りで59年から始まった在日朝鮮人の北朝鮮への帰国事業に従って、「地上の樂園」にあこがれて帰国した十万人近い在日朝鮮人がいただろうし、夫に従って海を渡った1800人からの日本人の女性もいただろうからだ。目的が別に考えられるとしても、危険を冒してまで一般の日本人を拉致する北朝鮮の魂胆は一向に読めない。袋詰めにして拉致するという乱暴な手口と共に、北朝鮮という国の得体の知れない闇の底深さが改めて浮かび上がってくる。

ところで、北朝鮮の工作員たちの手で無法に日本から連れ去られた日本人の拉致被害者の背後に先述の帰国した在日朝鮮人や飢えと貧困に苦しむ北朝鮮国内の人々などが膨大に張り付いている光景を透視しなければ、「拉致問題」の本質はみえてこないと思う。他国民を拉致する国は自国民をすでに拉致している国にほかならないからだ。つまり、他国民の拉致は自国民の拉致の上に成り立っている。確かに北朝鮮の人々は拉致されて国内に居着いているわけではないが、北朝鮮以外の国への移動を禁じられている点で生まれながらの拉致とみなされる。哀れなのは、「地上の樂園」にあこがれて希望に胸ふくらませ帰国した在日朝鮮人たちであろう。なるほど彼らは進んで帰国していったが、騙されて自ら拉致の穴の中に飛び込んでいったようにみえる。

「拉致問題」に臨む視座は自国民他国民を問わず、人間の身体的自由を奪って無法に連行・拉致するようなあらゆる全体主義体制の存続を許さない場所に立つものでなければならない。そうでなければ、いま目の前に現れている「拉致問題」の中にさまざまなかたちをとって潜在している無数の「拉致問題」を隠蔽することになるからだ。北朝鮮によって任意の日本人が無法に誘拐された今回の「拉致問題」は日本人の問題であると同時に、北朝鮮人の問題である。他国民の拉致は自国民の拉致を浮き彫りにしており、したがって日本人の「拉致問題」は、国内で拉致されている北朝鮮の人々がその拉致状態を引っくり返すような新たな国造りの主体として登場しなければならないことの根本的な問題を投げかけている筈である。拉致されている日本人や韓国人の全員が帰国するにとどまらず、「拉致」の思想によって成り立っている「国のために死ぬる国」の存続そ

のものが根底から問い返されなければならない。

今回の「拉致問題」は、日本人の拉致の手引きに関与したであろう日本国内の朝鮮総連に何らかのかかわりをもつ在日朝鮮人たちにまで大きな問題を投げかけている。これまで日朝や日韓で亀裂が生じた際に日本の各地で惹き起こされてきた朝鮮小中・高級学校への「朝鮮へ帰れ」等の怒号、脅迫電話や生徒への投石、罵倒、女子のチマ・チョゴリの制服への悪質な嫌がらせなど、今回も当然相次いだが、在日朝鮮の人々の対応はこれまでと全く異ならざるをえないだろう。日本で嫌がらせを受けるたびに祖国を信じて耐えてきたのに、その祖国がもう信じられなくなって、自分たちの中に耐えられるものはすっかり消えてしまったという痛切感が茫漠と広がっているにちがいないからだ。「拉致問題」によって在日の人たちはかすかに握りしめていた祖国への最後の希望を微塵に打ち碎かれ、北朝鮮の犯行であることを疑ってきた日本人以上の衝撃を受けたと思われる。

在日朝鮮人一世の詩人金時鐘は10・3付産経新聞に、《やはり理屈の通る国ではなかった。日朝首脳会談が平壤で開かれて、はや旬^{じゅんじつ}日を経るが、胸のつかえはますます重くなるばかりだ。》と冒頭に記して、その「胸のつかえ」をこう率直に吐露している。「北共和国」が世襲制の特異な国であり、国民は飢え、自由に物言えない硬直した国であり、在日帰国者の消息も掴めずに死亡が遅れに遅れて人づてに伝わってくるというような国であることは「重々承知」していたが、「拉致問題」だけは信じず、「大いに反発し否定もしてきた」。しかし、金さんのその思いは裏切られ、悲憤が次のように迸ってくる。《いかに無法な国とはいえ、13歳そこの隣国の少女までさらっていった、一体、どれほどの利益が北共和国にもたらされるというのだろう。ましてや、国家機密に属する情報活動のスパイ養成に、無理やり連れていった女性、平壤会談で明かされた田口八重子さんに該当するようだが、その彼女に「大韓航空機爆破」という、空恐ろしい事件の犯人の教育係を仰せ付けるであろうか。》

金時鐘という人の誠実さはだが、北朝鮮の非道をあげつらうことで拉致被害者の家族が住む日本の地で自らの安全を図ろうとする打算などとは無縁に、在日社会に身を置くことで北朝鮮とつながってきたこれまでの自らのありかたへと向かっていく。

《どうしてこんな国になってしまったのだろう。日本という自由に物が言える国にいて、なにをおもんばかり、北共和国との在日のつながりを見過ごしてきたのだろう。》

私は私で、生きるよすがの国でもあった北共和国への未練が、今もって根のところでうずいていて、日本語という枷^{かせ}をいいことに、同族の内幕を白日に晒すことを憚^{はばか}ってきた。いわば北共和国のとてつもない民衆統制に目をつぶってきたのは、他ならぬこの私でもあったということだ。》

しかし、ここで敢えて金さんの誠実さに対して次の言葉を厳しく向けなくてはならな

い。《そのような私が悲嘆と憤りに暮れている拉致被害者たちと、何をどうすれば思いを
通わすことができるだろう。》という方向に無媒介に歩を進める金さんの言葉に向か
うと、どうして金さんはそんなふうに考えてしまうのだろう。「悲嘆と憤りに暮れてい
る拉致被害者たち」と「思いを通わすことができる」者なぞ、いまはどこにも存在しな
い。ましてや、民族の振れに日々締め付けられている金さんのような在日の人々なら尚
更だ。そこに浮かび上がってくるのは断念であろう。その断念の深さを噛みしめる以外
に術はない。「思いを通わすことができる」者など誰一人としていないことを深く知っ
た時、初めて自分がなすべきこと、考えるべきことが限られた中でみえてくるかもしれ
ない。そして金さんが問うべきなのは、日本の拉致被害者たちと「思いを通わす」浅瀬
ではなく、北朝鮮国内に拉致されつづけている膨大な民衆と「思いを通わす」淵ではな
かったか。

もう一度繰り返すが、日本人の「拉致問題」は北朝鮮という国が国内の民の拉致の上
に聳えたっていることを明るみにしたのである。国民の拉致の上に成り立つ国は体制維
持のために、国外との関係まで拉致の思想を貫かざるをえないのであり、日本人や韓
国人の「拉致問題」とは国民を拉致している北朝鮮の全体主義的な権力体質が国外に向
かったにすぎない。したがって、多数の日本人を拉致していたことが明白にされたこと
によって、北朝鮮は日本だけでなく、世界の国々から批判を浴びなければならないの
ではなく、日本人の「拉致問題」が北朝鮮国民の拉致の上に積み重ねられていく権力構造
が温存されていることによって、北朝鮮は日本を含む世界からの批判を浴びなくては
ならないのだ。だが、「拉致事件は、過去の清算のなかで相殺される事柄では決してな
く、「駆け引きの対象であっては絶対ならない」と訴える金さんには、この考えは乏しい。
「共和国のとてつもない民主統制に目をつぶってきたのは、他ならぬこの私でもあった
」と自身に鞭を打つ一方で、金さんは《言わずもがなの事を敢えて言おう。現に北朝鮮
の国民は、最高権力者自らが認め謝罪した「拉致事件」のいきさつを一切知らない。いか
に最高の指導者とはいえ、権力者一人で取り仕切る謝罪は、政治的な事収めだ。北朝鮮
の国民こそ、このいきさつの事実を知り、押し込められた隣人のとどこおった叫び
に恥じ入ってこそ、謝罪だ。》と他方で祈るように言葉を綴る。だが、その言葉は一体
誰に向けられているのだろう。最高権力者自らが「拉致事件」についていくら認め謝罪
しようとも、北朝鮮の国民がその「いきさつを一切知ら」されていないのであれば、そ
の謝罪も「政治的な事収め」にすぎず、したがって、あるべき謝罪から程遠いと否定し
ているのだろうか。それとも、最高権力者たる金総書記の今回の謝罪を契機にして、「北
朝鮮の国民こそ、このいきさつの事実を知り、押し込められた隣人のとどこおった
叫びに恥じ入るようになってほしい」という切なる願いを語っているのだろうか。

はたして北朝鮮の最高権力者は「拉致事件」を謝罪したか。確かに初めて認めはした

が、謝罪したといえるか。金さんにはその疑いがない。「最高権力者自らが認め謝罪した」と思っている。だから、「権力者一人で取り仕切る謝罪は、政治的な事収めだ」とみるし、北朝鮮国民に「拉致事件」を知らしめるべきだというけっしてありそうにない架空の謝罪にどうしても思いを馳せようとする。金さんがいくらそんなことはあってはならないと語気を強めようとも、「拉致事件」は日朝における政治的な「駆け引きの対象」として持ちだされている。だから、あるべき謝罪からは程遠い。それは「拉致事件」の全貌を明らかにする姿勢をみせようとしなければかりでなく、死亡したとされる8人の拉致被害者に関する調査報告に一片の誠意もみられず、あまりもの杜撰^{ずさん}さに満ちている点からみても明白である。

日本の拉致被害者に対する北朝鮮の最高権力者の態度から、「謝罪」が遠いばかりではない。国民として拉致されている北朝鮮の人々に対する最高権力者の態度からも、「謝罪」は遠いといわねばならない。北朝鮮の国民が日本人や韓国人の「拉致問題」について一切知らないことと、彼らが自分たちの「拉致問題」について一切知らないことは、全く同じ権力構造にほかならない。自分たちがどれだけ拉致されているかについてまだよくは知らない北朝鮮国民の上に最高権力者が君臨していることを知るなら、そのような北朝鮮国民に日本人や韓国人の「拉致事件」について明らかにすることは、彼ら自身に対する「拉致事件」を明らかにすることになり、最高権力者は国民にも謝罪してトップの椅子から自ら降りざるをえなくなることを意味する。

拉致されている北朝鮮国民は日本人の「拉致事件」について知らないだけではない。自分たちの国がなにをしているかも、世界ではどのようなことが起こっているかも、おそらくなにも知らないし、知らされていないにちがいない。金さんは「北朝鮮の国民こそぞって、このいきさつの事実を知り」と、いかにも日本人の「拉致事件」についての「いきさつの事実」のみを取り上げているが、北朝鮮国民がその「事実」を知ることが一体なにを知ることになるのか、という点での想像力を全く欠如させている。今の最高権力者を奉る全体主義的な権力構造に北朝鮮が貫かれているかぎり、「北朝鮮の国民こそぞって、このいきさつの事実を知」る機会は永遠に訪れないという明らかな道理に目を閉ざしている点で、金さんは依然として「北共和国のとてつもない民衆統制に目をつぶ」りつづけているのではないだろうか。

今回の「拉致問題」を真正面から受けとめるのに無理が感ぜられるほど、やはり金さんの身体中で「北共和国への未練が、今もって根のところまでうずいてい」るのだろう。身を引き裂くような「冷酷な事実」にはどうしても耐えられないのだろう。《金総書記が望むように、「両国関係が改善され、相互の信頼が醸成される」ためには、このような真摯な対応が私たち朝鮮人の側に求められている》というところへ流れていく金さんの言葉には、もう踏ん張りが効かなくなっている。なによりも「金総書記が望む」のは、

「両国関係」の「改善」や「相互の信頼」以上に、自らの権力基盤の確保にほかならないことはもはや誰の目にもあきらかであろうのに。《無惨なことだが、意を決した金総書記の国際社会へ向き直す契機に、拉致被害者たちの犠牲が宿ることを祈ってやまない。》と文章を締め括る金さんの痛々しい非現実的な姿を思い浮かべると、金さんに向かわせてきたこちらの言葉も締め括らざるをえなくなる。

ただ、《身の置き場もなく悲嘆に暮れている拉致被害者たちの何百倍もの悲嘆が、朝鮮人の側に歴史的に滞っていることを、日本人自身が身をもって感じ取ってくれる》ことを願っている金さんの控え目な姿を無視するなら、それは公正ではないので、こちらもしちゃんと向き合っておかなくてはならない。北朝鮮という全体主義国家は、戦前の大日本帝国によって撒かれた種子が順調に発芽したものと、私はみる。くだけていうと、北朝鮮の生みの親は戦前の大日本帝国、育ての親は今もう消滅したソ連邦であり、中国と共に歳月を重ねてきたのではないか。

『^{ピョンヤン}平壤ハイ』（石丸元章 飛鳥新書）に言及して、かつて私はこう書いた。《戦前の大日本帝国は敗戦によって瓦解し、戦後の日本は一見平和で民主的な社会に生まれ変わった（生まれ変えさせられた）ようにみえ、海外旅行ブームに煽られて、かつての大日本帝国の植民地であった北朝鮮にまで足を踏み入れることができるようになったけれども、戦後の日本人観光客がその北朝鮮の地で、「今の日本にはない大本営や大政翼賛会を見つけなくてはならぬ」くなるということは、戦前の大日本帝国がほとんどそのままのかたちで北朝鮮に温存され、死なずに生きているということを意味する。つまり、戦前の大日本帝国は戦後の日本では死滅した（ようにみえる）かもしれないが、北朝鮮では活き活きと生き続けているのであり、このことは、〈大日本帝国〉は第二次大戦後もけっして滅んではいなかったという事実を示唆している筈である。》

〈ナチスドイツ〉がイスラエル国家で残存しているように、〈大日本帝国〉が北朝鮮の地で生き続けているという問題は、《戦後の日本社会はあくまでもよその国のこととして済ませられるかどうかという問いを突きつけているように思われる》。日本の戦後社会にとっての本当の戦争責任―戦後処理の課題はしたがって、北朝鮮の地に大きく突出している〈大日本帝国〉を、《戦後の日本社会が戦前の大日本帝国をいまだに払拭しえていないことの明白な証拠として現前して》いるものと捉え、《北朝鮮の地から〈大日本帝国〉が消滅しないかぎり、戦後の日本は依然〈大日本帝国〉をかかえ込んだまま》であるという視点を基軸に据える必要があるだろう。

この文章は今回の「拉致問題」が起こる二年以上も前（00年7月1日記）に書いているが、「拉致問題」に交差させていえば、天皇の代わりに金親子を戴いた北朝鮮の〈大日本帝国〉的国家体制は現在、「日本人拉致事件」を惹き起こし、日本の戦後社会がいまだに払拭しえていない戦前の大日本帝国は、植民地化した朝鮮半島から百万人を超え

る朝鮮人を内地・樺太（サハリン）・沖縄などに強制的に連行してきたという問題を浮かび上がらせている。いうまでもなく北朝鮮が自分たちの手を染めた「日本人拉致事件」を正当化するように、戦時中の大日本帝国による「朝鮮人強制連行」をもちだすことは言語同断だとしても、だからといって「日本人拉致事件」の背後に、日本人が戦時中に朝鮮半島で行ったことと比較するなら……という思いを一蹴してよいことにはならない。

このような考えは独裁国家の北朝鮮をつけ上がらせるだけであり、断固とした日本政府や日本人の氣勢を削ぐという非難の声を引き寄せることになるかもしれないが、北朝鮮の地から「日本人拉致事件」を惹き起こすような全体主義体制を真に消滅させるためには、その消滅を促そうとする日本自身も北朝鮮を鏡として、戦時中に行ってきた問題を戦後にまでずっと引きずっていることの前に改めて立ち止まり、深く内視する必要があるだろう。つまり、戦後の日本は、戦時中の「朝鮮人強制連行」の記憶をいまも継続しながら国民を拉致しつづけている現体制を消滅させ、北朝鮮の人々を真に解放する責務を最大に負っているという問題なのである。そして、日本国内の在日の人々に日本はどう向き合っていかななくてはならないかという問題でもある。

この問題に触れて作家の辺見庸が『サンデー毎日』（02・10・20）の連載時評で、9月27日付読売新聞（関西版）の「気流」（読者のページ）に掲載された京都朝鮮中高級学校の24歳の教員、文峯秀さんの投書を紹介し、こう書いている。

《タイトルは「日朝平壤宣言 心から歓迎を」である。文さんはまず、この歴史的な宣言を喜ぶ一方で、拉致問題に触れて「改めて遺族の方々には心からお悔やみ申し上げると同時に、誠実な補償が行われるべきである、と私は思う」と述べる。筆者はさらに「日本の方々に考えていただきたいことがある」と前置きし、次のように記している。

「歴史に〈もしも〉と言うのはあり得ないが、『もしも日本による植民地支配がなかったら？』『もしも不幸な過去の歴史をもっと早く精算していたら？』拉致問題は起こりえたのだろうか。私の祖父母はともに日本には植民地時代に渡ってきたが、日本による補償はもとより謝罪の言葉すら聞けず他界した。／そして何よりその子孫である私たち、在日朝鮮人は今なお、目に見えない差別と闘い、いわれなき言葉（暴言）を受けながら生きているのである。／このような問題が二度と繰り返されないためにも、一日も早い日朝国交正常化を望んでやまない」。この時期にこれだけのことを堂々と主張することの視えざるプレッシャー、それをトップで掲載することのリスクの両方を私は知っているつもりだ。だから、これを書いた文峯秀さん、それをしっかりと受けとめた同紙投書欄の担当者の心根を私は尊いと思う。文さんの表現はずいぶん抑制されている。「私の祖父母はともに日本には植民地時代に渡ってきた……」とは、補償や謝罪という文言と結びつければ、「朝鮮人強制連行」のことを指すのであろう。》

辺見庸は、《いま語ろうとして語りにくいこと。それは「日本人拉致事件」と「朝鮮

人強制連行」のあまりにもむごい関係性と対比であり、《それはそれ、これ（日本人拉致問題）はこれ、という議論もある。済んでしまったことと現在進行形のこと、という見方もある。果たしてそうであろうか。私は深く深く疑う。》と書き刻む。彼もいうように、「朝鮮人強制連行」を《いまもちだしてはならないという空気がこの国には蔓延している》のは、「日本人拉致事件」とそれを相殺されてはならないと警戒しているからである。もちろん、戦時中の日本による植民地支配に何もかもなすりつけようとする北朝鮮の狡猾さには凜と対応しなければならない。と同時に、日朝国交正常化とは、戦前の日本の枠組みの中での全体主義権力を維持している現在の北朝鮮から、拉致されつづけている北朝鮮国民を真に解放していく方向で取り組み、それが戦前の日本から戦後の日本が真に脱却していく契機として推進されなければならないということだ。

もう一つ、在日韓国人二世の東大教授姜尚中が同じ『サンデー毎日』で、《国家テロを北朝鮮の最高責任者が認めた以上、生存者の帰国や事実解明、それ相応の謝罪を求めることは当然です。しかし、拉致問題と今後の日朝交渉は切り離して考える必要があり、歴史的事実として《日本は植民地支配の精算をしていない。（強制連行や徴用に伴う）戦時中の行方不明者もかなりいます。韓国とは日韓条約で決着したかもしれませんが、北朝鮮との間に横たわるこうした問題は放置してもかまわないという正当性はどこにも》ないと指摘している。問題は、歴史的事実を放置してはならないだけでなく、どの方向で決着していくかであろう。

姜尚中は90年の金丸訪朝団による3党共同宣言（自民、社会、朝鮮労働党）以降の日朝双方の主張を踏まえるなら、「拉致問題」を日朝交渉の前面に押し出すのは避けるべきである、日朝交渉の破綻は米朝交渉を促進させて日本を今よりも不利な状況に置くか、それとも深刻な米朝対立を招いて日韓を苦境に追い込むかのシナリオが考えられるので、《北朝鮮を追い込まず、最悪の事態を回避するためにも、今こそ日本版の包容（太陽）政策が必要だと思》うと提案する。だがその提案では、日本人の「拉致問題」だけでなく、現体制に北朝鮮国民が拉致され続けている問題までが放置され、現体制の延命に力を貸すことになりかねない。また、彼の主張は「日本人拉致事件」と「朝鮮人強制連行」を相殺してしまう発想に陥りかねない。

《今こそ、冷静になって》、北朝鮮による日本への核攻撃といった破滅的な事態に陥らぬように慎重に対処しなければならないが、しかし北朝鮮への援助が現体制の延命とは反対方向の、本当の意味での北朝鮮国民にとっての「日本版の包容（太陽）政策」となりうるものであらねばならない。「国のために死ぬる国」の臨戦態勢下に戦後ずっと置かれつづけている北朝鮮国民を、まずは隣国の日中韓と同じ「国のために死ぬなくなった国」へと解放することこそが、危機の解除の最大要因であることは明白であろう。

2002年11月2日記

